

新島 襄の言葉

鈴木 直人（大学文学部教授）

真理は寒梅の似し、敢えて風雪を侵して開く

寒梅館の名の元となり、同志社礼拝堂前の碑に刻まれた、同志社人なら誰しも知るこの句は、明治24年同志社を卒業し、後に日本銀行総裁となった深井英五に贈られた色紙に由来する。この句は真理を追究することの厳しさを風雪の中に咲く寒梅に譬えて詠ったものである。この真理について、同志社時報106号（1998年10月号）の本欄で本井康博神学部教授は「真理之囚人コソ真ニ自由人ナレ」という言葉を解説し、「新島自身が『真理とはなんぞ、これ天の道なり』と喝破しているように、新島にとって真理とはキリスト教そのものであった」と指摘している。『新島襄の漢詩（同志社新島研究会発行）』の著者小川与四郎は、この句をふまえて作られたと思われる「寒梅詩」（庭上一寒梅、笑侵風雪開、不爭又不力、自占百花魁）の解説で、「暖かい大磯では、梅は早くも暮れから綻びはじめるという。百足屋の庭の梅も暮れか正月には、笑顔のような美しい花を開き始め、ふくよかな香りを漂わせて病人を慰めたであろう。香骨吟身共に清絶の境に入り、しばし天地の心に思いをいたしたるか。まことに格調高きこの一詩、それは梅花を詠じて自ずと『従容身を自然に委ね魂を天父に任せ』たる者の姿を映し出したるが如し」と記している。松山義則前総長は同志社を去る教職員一人ひとりに「寒梅詩」の「笑侵風雪開」を墨し、餞として贈られていた。この言葉に籠められた新島の思いを胸に、同志社を旅立って行っていたいだきたいものである。

真理似
寒梅教
風雪
新島襄